

旧河内峠を歩く

4月15日砂谷地区HP部会メンバーの仁科、上瀬、賀張の三人で、昔の人々が五日市から湯来方面に行くのに使っていたという旧河内峠を歩きました。

賀張の車を白川の児童公園に置き、仁科さんの奥さんに彩ヶ丘団地入り口まで送ってもらい、ここから9時20分スタートです。情報局長の仁科さんの先導で、旧街道と思しき道を民家の間を縫うように歩くこと20分山道の取っ掛かりに着きました。途中自宅の前で菜園の手入れをしておられるご婦人に朝のご挨拶。家庭菜園は日本の隠れたクールジャパンですぞ。このおかげで、食の足しになるだけでなく、なんともいえない穏やかな情景をかもし出しています。又左遠方に見えた家並みは彩ヶ丘団地でしょうか。こんな企画がなかったら見る事の出来ない新鮮な風景です。それにしても狭い山裾に沢山の家のあること。佐伯区ならでの風景です。

山道に取り付いて竹林や梅林などをみながらしばらく歩くと、荒谷川右岸の小集落に着きました。ここで世間話中の二人のお年寄りに声をかけると、奥にある大杉集落の話や、蔵の紋章に鰻絵が描いてあるのは本当の分限者だとかの話が気さくにしてくださいました。蔵の鰻絵は女性の着物姿のようにも見え大変珍しく思いました。三人が河内峠を越えるのだという、ここから5kmほどだとのこと。ここから少し歩くと荒谷川の左岸に移り、途中大きなコンクリート砂防ダムが二つもありました。台風19号の災害の後設置されたようです。いずれも土石は堆積しておらず安心しました。又ダム背面の状況を監視する監視カメラもあり、日本の行政のきめ細かさを再認識しました。途中免訴の碑(今はない豪雨で失われた免訴の証)や、先の昭和天皇が皇太子時代に黒松の種をまかれたことを示す案内板があり、興味深く思いました。

出発から1時間程度で、舗装された林道を離れ、山道の入り口に差し掛かりここで小休止。地元の人が沢水で洗車されているのに会いました。思えば贅沢な洗車です。

ここから旧河内峠までは30分程度の道程ですが、この間には余り他では見られないテンナンショウ(別名マムシ草)が数多く見られました。道幅が思ったより広く、往時をしのばせる敷石が見られました。

河内峠には11時10分頃に着きました。ここには江戸時代の画家岡眠山がここを通ったとを示した案内板が設置されています。周りには茶屋などの設置跡を思わせる平地が数箇所ありました。

ここで早めのおにぎりの昼食をとり、下山しましたがこの距離は800mです。特筆すべきはこの間藪椿が沢山自生していることです。きっと昔の旅人もこの椿を堪能したことでしょう。

右側は大変な急斜面で2箇所ほど路肩の崩れていたところがありました。注意が必要です。只全体の印象としては道幅も広く、意外な明るさがあり、往時は歩きやすい街道だったろうと思われる。上瀬さん沢山の写真撮影お疲れさんでした。

中倉集落跡

午後から湯来温泉手前にある中倉集落跡をたずねました。水内川を渡って数百メートル沢沿いの上行くと、少し開けたところに出て、小さな祠がありました。祠の前には白い花が多く咲いていました。後で調べますと一輪草です。かつての村民の思いがこの花に込められているように思いました。これを過ぎてなお上がっていくと、古い石積みが目につきます。かつての棚田です。今は大きな杉が生えています。

もう少し上がると、解体中と思える古民家があり、その前の墓所を整理されている人(おそらく竹田さん)がいました。この中倉集落ゆかりの人で、左上にある毘沙門天を守ったり、周辺を花壇で飾っているようでした。

毘沙門天の周囲には古い椿の巨木があり、多くの花を咲かせていました。

毘沙門天内部には、集落の棚田が健在であったころの写真が飾ってあり、これで見ると毘沙門天のはるか高所まで棚田が作られていたことがわかります。現在は歩く道もなく、見る影もありません。中倉部落は昭和57年にその歴史を閉じたことが次の縁起でわかります。

毘沙門天縁起

天長年間寺屋敷(此の地の南方標高700m)に弘法大師真言宗空山寺を開基す。爾来嘉歴年

間に至る約500年間近隣の山上真言寺院跡と共に高野聖の一連の修道場となる。嘉歴年間最後の聖(和尚)此の地に寺院を移し仏事を営むも、和尚死後後継者無く当毘沙門天は仏体より神体に変身し中倉部落の守護神となり今日に至る。庭前の榊は寺院より神社に変格死たる際に植樹したるものと推定され樹齢約600歳なり。(和尚の墓庭前にあり。此の地の上方を「寺の上」との地名を残すはその証なり。)和尚生存中建武の争乱あり。全身創痕の士大将逃れ来たり救いを求め。和尚これを匿う。全身蛆となり死去す。邑人これを埋葬す。

明治の初め杉の古木を刈りたれば、樹魂煙となり天に昇れり。椿の古木大正初期に枯れたり。当地東方1.5キロに「明市」という部落あり文礼初年に絶滅す。明市の氏神は中倉にて祭礼を継ぐ。昭和40年10月「蛆の杜」「明市」の御神体を遷座し当社に合祀す。

毘沙門天の神使百足は鶏の好食するところ神勅により600年に亘り鶏を飼育せず。神勅に叛くこと無かりし故600年間1名の不具者も出生せず。「てつしの時参詣」と称し真言密教の伝統を残す。密かに熊手を奉納し参詣祈願すればその願い叶わざる事なしとの伝承あり。明治末期までは熊手の奉納山を築くの盛況なり。

毘沙門天自ら光芒を放ち当中倉に降臨せり。「毘沙門天降臨岩」「旗の頭」の名称これに由来す。宇賀中倉の邑人夜陰密かに遷座を願うも毘沙門天自重万貫となりて動ぜず手のみ取れたり。当毘沙門天手を欠き宇賀中倉の毘沙門天手のみ祀れるはこれが故なり。

大正10年改築昭和22年セメント瓦に葺き替え昭和51年中倉部落歴史を閉ず。昭和57年旧氏子ならびに信者の寄進に拠り、内陣の一部に真言寺院の遺物を残し8月21日上棟新設す。

昭和57年10月吉日 竹田春登誌す

伝説伝承地名略図等

岩倉山

伊勢皇大神宮の空を真西に進むとその下に、「伊勢」「大和」「河内」「和泉」「淡路」「備中」「備後」「安芸」「周防」「長門」の古い国々を眼下に見ながら日本海に出る。この真下に古代の謎が隠されている。岩倉山(磐座山と書く山もある)という巨岩崇拝の原始宗教祭祀の岩山が連綿と一直線上に並んでいる。此の意味は中倉部落開拓の歴史が有史以前に既に始まっていた証拠であろう。

遠藤屋敷

文治元年旧暦3月24日壇ノ浦の合戦に敗れた平家の落武者遠藤弥平次国広という武士此の地に住居を構えて隠れ住んで以後此の地が残る。その後国が鎮まるや山を降りて「弥平谷」を拓く。以後遠藤の姓を捨て国広と名乗る。国広氏の始祖なり。(此の項故田村寿三氏からの伝記)原始宗教埋葬跡

古墳時代以前の原始宗教では死者は天に還ると信じられた。その為死者は天に近い山頂に埋葬する風習があり、遠藤屋敷上方の稜線両側に埋葬跡が並んでいる。

かしこまり柵

樹齢千年を超えと思われる巨木が巨岩の上に人が正座した姿で倒れもせず風雪に耐えている。根は隠れて正面から見えず、根も無く恰も岩上に木が正座したる姿ゆえ此の付近の地名となる。中倉の歴史を知る只一人の生き証人なり。

訪い道

中倉毘沙門天と明市の明神様が恋仲になった。毘沙門天が明神様の社に通うためには七浴七丘を越さねばならず二人の神様が相談しその中間を「訪い道」と名付けて毘沙門天と明神様の逢引場所になった。昭和40年明神様合祀只今同居中。

茶里制の名残

奈良朝時代に設けられた制度だが中倉でも最後まで「上条」「追条」「下条」の区分した呼び名が残されていた。田畑は人と同様に一枚一枚の田畑に名前があって「屋敷の町」「火打町」「清水河内」「大島」「原島」などと呼んでいた。

宝物の隠し場所

朝日さし、夕日さし、白南天(あるいは小菖蒲という)のある土中に埋めてあるという。

その他の神々

「山の神」椿に祀ってある。塞神、道組神の役目も兼ね入り口にあつて道路を見守り邪神の入るのを防いでいる。「氏神」神体仏像鏡あるも昭和43年10月本社に遷座す。昭和17年岡村言氏寄進にて新築し昭和57年屋根瓦葺き替え。

中倉各地の名称

裏面に詳細と略図を示す。